くノ一淫舞伝
霧香
闇の風に抜刀散る
小説 黒井弘騎
挿絵 てんまそ
立ち読み版

第一章　抜忍三華　006
第二章　双忍連辱　060
第三章　外法蟲戯　115
第四章　巫蟲淫獄　169
第五章　淫華応報　194

登場人物紹介

Characters

彩牙(さいが) 霧音(きりね)

忍者組織ヤミカゼの上忍家「彩牙」の当主。組織の非人道的な行いに憤り、抜忍となる。「斬音姫」の異名を持つくノー。

月美(つきみ)

ヤミカゼの陵辱調教によってくノーにさせられた美女。霧音たちとともに忍の里抜けを試みる。

雫(しずく)

幼少のころにヤミカゼにさらわれ陵辱調教を受けた少女くノー。月美を姉と慕う。

魔沼(まぬま) 冬華(とうか)

ヤミカゼの上忍家「魔沼」の当主。抜忍である霧音たちを追う。霧音に偏執的な愛情を抱いている。

『第二章　双忍連辱』より

ぬる、にゅるずぶ！　堕ちかけた牝豚をさらなる奈落へと引きずり戻そうと、ザーメンスライムは休む間もなく蠕動を続けた。絶頂愛液を吸ってさらに粘りを増した濁怪が、絶頂直後の鋭敏ボディを執拗なまでに可愛がる。防壁を破られた少女は、地獄じみた悦びにあさましい声でよがり悶えた。可愛らしい童顔は、快楽に溺れて蕩けきっている。

「雫、雫！　ダメですわ、気をしっかりもって！　あなたは、強い子のはずですわ！」

「んひい、ら、らめですぅ……おねーさま、あぁうぅ！　んはぁ、き、きもちいいの……イクの気持ちよすぎて……雫はもう、もうらめなんですぅ……うぅうぅ～！」

もう、仲間の声も届かない。〝おんな〟としての悦楽に再び囚われたくノ一は、幼き肢体を淫らに踊らせ続けるのだった――。

※

「堕ちたな。所詮は〝おんな〟よ、快楽には逆らえんわ。次は貴様が思い知る番じゃ！」

「だ、黙りなさい！　誰がお前などに……く！」

まずは幼忍を沈めると、追忍は残る月美へと矛先を変えた。犬のポーズで這い蹲るくノ一の背後に回り、和服の裾をめくり上げて尻峰を曝け出す。むっちりと肉をつけた熟桃を、老人の指がいやらしくひと撫でした。

「この張り、この柔らかさ、この手触り。熟れきった牝犬の尻じゃ、責めがいがあるわ！」

――く、う！　また、お尻ですのね……！

下卑た品評に、強気な美貌が屈辱に染まる。豊満な臀部は、たっぷりと開発された最大

の弱点だ。先ほど追忍に責められた余悦が残る性感帯は、怪翁に触れられただけで再び疼き出してしまう。従順すぎる急所を責められることに、令嬢は恐怖を禁じえなかった。

「下衆が……誰がお前などに屈するものですか！」

月美はきゅっと尻を引き締め、必死で強気を取り繕った。ここで自分が踏ん張らねば少女を救えない。かけがえのない友のためにも、月美は意気を振り絞る。

だが、追忍の責めは予想以上に陰湿なものだった。

「牝犬の分際で生意気な小娘が……これはきつい仕置きが必要のようじゃな！」

笑い、濁鬼は一つの道具を取り出した。透明のシリンダーの先に、指ぐらいの大きさの管がついている。尖った先端が、くノ一の尻峰へ向けられた。

「う……。そ、それは……」

自分に向けられた道具に、月美は言葉をなくした。たっぷりと溶液を詰め込んだ尿瓶のような外見――それは肛門を穿ち直腸に薬液をぶち込むための浣腸器に違いないのだ。しかも中に入っているのは、異様に粘度の高いアメーバ状の白濁塊。生きているように蠢動する薬液は、今自分の手足に絡みついている精液怪物と同種のものだ。

――ま、まさか。あんなものを……お、お尻に？

汚辱の予感に、ふるりと尻房を揺すってしまう美貌のくノ一。アナルへの挿入を免れようと、お尻に力を入れて尻たぶを窄めようとする。だがそれより早く、浣腸管が尻の隙間に押し入った。尖った先端が、可憐な菊穴へと押し当てられる。

「くく、遠慮せずともよいぞ。濁鬼様特製の精液浣腸じゃ、たっぷりと喰らうがよい！」
「や、いや！　そ、そんなの……くぁぁぁっ⁉」
ぬぷっ、ぬぷぷぷ！　窄められたアナルに、ガラスの嘴管が力任せに突き刺された。肛門に力を入れる月美だったが、器具挿入は止められない。狭隘な尻門がこじ開けられ、一気に根元までもをブチ込まれる。
「か、はひっ！　そんな……い、いきなり……！　くぅ、ふ、深……んくぅぅぅっ！」
息ませた尻穴を広げられ、菊皺を伸ばされながら腸奥にまで突き入れられる。冷たく硬い異物感に、月美はたまらず苦しげな悲鳴を漏らした。犬のポーズで固定されている四肢が戦慄き、どっと嫌な汗が噴出する。だが、嘴管挿入など肛辱の序章にすぎなかった。
「本番はこれからじゃ。くく、注いでやるわい！」
「や……いや！　いやですわ、そんな、やめ……！」
拒絶の言葉など、聞き届けられるはずもない。栓が押され内容物が押し出され――、
「や……は、ひぁ⁉　は、入っ……くひぃぃィ～！」
どぷっ……どっぷどぼどぶぶぶ！　大量の粘液が凄まじい圧力で押し出され、直腸奥にまで注ぎ込まれる。腸管内を埋め尽くされる辱感に、月美は背中を反らせて狂乱した。情けない犬のポーズのまま腰が痙攣し、たわわな尻峰がぶるんぶるんと左右に振りたくられる。発射された精液は生々しくヌルつき、にかわのような粘度で腸襞に絡みついてきた。おぞましい温もりと粘つきが、鋭敏な肛粘膜全体に染み込んでいく。

――い、いやぁ……！　お尻の中っ、こ、こんなにたくさん……！

月美にとって、アナルは膣以上に鋭敏な快楽穴だ。多量の汚辱を直射された瞬間、たまらない悦びが尻穴中に広がっていく。抑えきれず、抜忍は涎まで流して感じ入っていた。

「あさましくよがりおって。尻狂いの淫乱くノ一が、浣腸されるのがそんなに好きか。まだまだたんとあるでの、たっぷり味わうがよいわ！」

「ひ、あ⁉　そ、そん……っくあぁ⁉　ま、まだ出て……い、いっぱいすぎ……ぃっ！」

ぶりゅ、ぶりゅぶりゅぶりゅ！　蓄えられていたスペルマが、休む間もなく大量に注ぎ込まれる。浣腸された精液の量は半端ではなく、腸管すべてが埋め尽くされて腹部が盛り上がってしまうほどだった。あまりの圧迫感に、菊門がビクビクと痙攣する。

官能を擽るのはその圧迫感や感触だけではない。腸内いっぱいに詰め込まれた薬液は、ヤミカゼシノビ特製の魔精液なのだ。床に満ち雫を責め犯しているのと同じアメーバ怪物が、排泄管の中で自律的に蠢き始める。不定形なゲルが腸襞の隙間にまで入り込み、にちゃぐちゃと蠢いて粘膜をねぶり可愛がってきた。

――は、ひ⁉　な、なんですのこれ……お尻の中で、う、動き回ってますわ……ぁ！

ぬる、にゅるにゅるにゅるり！　ぶちまけられた精虫が、縦横無尽に伸張して暴れ回る。おぞましい粘つきで腸壁を擦られ、生出しの精液そのものの熱さを感じさせられ、ゲル質の流動によってお尻の中を掻き混ぜられる――ザーメンスライムの腸愛撫は、開発されきった性感帯にとっても未曾有の快楽だった。

「く、ひあぁうっ！　ひん、ぬるぬるして……こ、こんなのっ……おぁ、ああ～！」
凄まじい圧迫感、そして腸内で蠢くスライムの動き。苦痛と快楽の同時責めに、マゾヒスティックな肛悦を刻み込まれる。初めて味わう未曾有の粘悦に、月美は左右にヒップを振って悶絶した。突き刺されたままの浣腸器が震え、逆流した粘濁が接合部から噴き零れる。粘悦に応じて垂れ出した愛液が、逆流精液と混じり合って太ももにまで垂れていく。
「尻を振って悶えおって、悦んでおるのか？　これでは仕置きにもならんの、ぐひひ！」
「ち、違……わたくひ、悦んでなん……ひぁあ！　だめっ、う、動かないでぇ～！」
恥辱に抗う月美だったが、抵抗は長くは続かない。執拗に弱点を可愛がられ、すぐさま従順な嬌声を搾り取られる淫乱くノ一。ずるずると粘濁が蠢くたび、排泄欲求を擽られ妖しい肛悦を覚えてしまう。苛烈な圧迫と粘着質な腸悦に、令嬢の矜持が蕩かされていく。
――こんな……雫が見てるのに。わたくしが、あの子を助けないといけないのに……！
逆らえない。気持ちよすぎて――悔しくて情けないのに、スライムにお尻を犯されるのがたまらなく気持ちよすぎて、少しも力を込められない。
雫が耐えられなかったのも当然だ。不定形のゲルにぬるぬると愛撫される、考えたこともない悦び。未成熟なあの子が耐えられるわけもなく――否。
快楽で躾けられた、惨めな〝おんな〟の自分たちが耐えられるわけがない。
「い、いい……お、お尻……いいぃ！　らめぇ、こんなの、ら、らめですのにぃぃ～！」
知らずの内に、月美は腰を振ってはしたなくよがり悶えていた。触れられてもいない秘

裂からは敗北の証が垂れ流れ、褌を濡らしガーターソックスを汚している。気品ある美貌は屈辱に紅潮しながらも、否定できない悦びにあさましく蕩けてしまっていた。肛辱のくノ一は四つん這いのポーズに相応しい、まさに牝犬のような乱れ様を見せつけている。

「あは、お、おねーさまも……あひんっ！　や、やっぱり感じてるんですね……ああぅ！」

「い、言わないで雫ぅ。だめなの、わたくし、お、お尻だけはぁ……あ、あはぁあ～！」

眼前で悶える少女の姿、そして絶え絶えに聞こえる嬌声が、月美の官能を余計に昂ぶらせた。雫も自分同様に乱れる牝犬の姿にいっそうの欲情を駆り立てられ、粘悦絶頂でひくつき続けている秘裂から愛液をしぶかせて乱れ狂う。ぶしゅぶしゅと飛び散る濃厚な絶頂潮が、令嬢の顔にまでかかっていった。

「や、あ。雫のでぇ……お顔、ど、どろどろですわぁ……！」

気高い美貌が、ぬるついた愛液でべっちょりと汚される。濃厚な粘り、咽るような性臭。友の蜜液を顔面に浴びせられる恥辱に、乱れた令嬢は倒錯した興奮を覚えてしまっていた。汁まみれの美貌をはしたなく蕩けさせ、月美は四肢を戦慄かせて感じ入っていた。

「おねーさまの綺麗なお顔、雫の恥ずかしいおつゆでぐちゃぐちゃ……あは、綺麗……」

「やっ……見ないで、は、恥ずかしいですわ……おぁあ！　お、お尻っ、はげしぃ～！」

互いの痴態が、互いの官能を加速させる。堕ちかけた二人のくノ一は甘い声で相手の名を呼び、狂態を慰め合って妖しい快楽に溺れていった。その間にもスライムの動きはまるで休まることはなく、二人をさらなる淫楽の淵へと引きずり込んでいく。雫の幼門も、月

美の熟華も、互いに淫らな開閉を早めつつあった。
「イ、イク……雫はおねーさまの恥ずかしい姿を見ながら……ま、またイキそうですぅ！」
「わ、わたくしも……浣腸なんかでイキたくないのにぃ、も、お尻がイキかけて……っ！」
互いに敗北の証を噴き零し、潤みきった視線を絡ませ合う月美と雫。もう耐えられない——二人の抜忍は、ともに敗北の絶頂へと昇っていく。
だが、小生意気な美女に与えられた肛門法悦は、ただ甘美なだけのものではなかった。
「はぁ、あああ。雫ぅう、わたくひ、も、もうイキま……あっひぃいい⁉」
ぐりゅ、ぐるるる！　濡れた嬌声を掻き消すように、ぐるぐると腹が鳴った。肛辱による飛翔感とともに、凄まじい圧迫感がお腹の中で膨らんでいく。活発に括約筋が伸縮し、腸粘膜が逆波を立て波打っている。尻門が戦慄き、むりむりと中身をひり出していく。
——そ、そんな⁉　や、お、お腹、がぁ……⁉
腸の中身が出口に向かって流動する。己の身体が為そうとしている生理現象に、月美は言葉を呑み込んだ。生温かい浣腸液を大量に流し込まれ、美囚の排泄器官は変調をきたしてしまっていたのだ。下った腹が下品な音を鳴らし、内容物を吐瀉しようともがいている。尻の内側で脈を打つ排泄欲。つまりは——、
「だ……だめ、だめぇぇ！　出る……おなかっ、も、漏れてしまいますのぉお——ッ！」
恐怖と恥辱に、令嬢は涙を流し悶え狂った。振りたくられた尻峰の奥深く、浣腸器を咥え込んだアナルが激しく広がっていく。追い詰められた肉体は、意思を無視して排泄行為

に及ぼうとしてしまっているのだ。
「いや、いやあぁ！　こんな、こんなの絶対だめですわ……ひあぁぁ、らめ、らめぇぇ！」
切羽詰まった声で泣き叫ぶ月美。人前での粗相など、プライド高い令嬢に許せるはずがない。きゅっと尻穴を窄めるも、絶頂寸前で蕩けきった身体にはまるで力が入らない。その上腸内のスライムが自ら出口へ向けて逆流し、腸壁を可愛がって排泄欲を刺激してきた。たまらず括約筋が勝手にひくつき、咥え込まされていた浣腸器をひり出していく。
「おぁぁ、あぁぁン！　抜けるぅ……らめっ、出ちゃらめですのぉ……んんっ、ひぃい！」
栓の役目をしていた責め具が抜けるのが、恐ろしくてたまらない。だが管が抜けていく切なさと、圧迫から解放される爽快感は、淫乱な尻門にとってあまりに気持ちよすぎた。限界まで昂ぶっていた官能がいっそう高まり、子宮が痙攣して大量の愛蜜を噴き零す。
「ははは！　限界じゃな。いいぞ、仲間の前でひり出しながらイき狂うがいいわ！」
「い、いやあぁ！　そ、そんな屈辱ぅ……んっひぃい！　だめぇ、と、とまらないぃ～！」
歯を食いしばる月美だったが、身体の欲求には逆らえない。瓶管がずるずると抜ける爽快感に引きずられ、美女の意識も天国へと連れていかれてしまう。
「くあ、あ！　おあああ！　おおぉ、ぬ、抜け……！」
ずぽんっ！　下品な音を立て、浣腸器がひり出された。瞬間、苦悶という支えを失い、くノ一の意識が快楽一色に塗り潰される。
気持ちいい。尻が気持ちよすぎてたまらない――！

「イ、イク……あはあぁ、イっくぅううう〜!!」
ビクン！　と背中が強張り、秘門から大量の愛液が潮を噴く。肛虐絶頂の悦感に、喉を仰け反らせイキ声を上げる淫乱くノ一。瞬間、尻門を引き締めていた意識も掻き消えた。アナルが限界まで開ききられ――、
――あ、あああああ！　出る……で、出ちゃう……！
ぶりゅっ！　ぐちゅるぅ、ぶびゅっぶびゅうう！
「あぁお、おっおおぉおお！　出てるっ、出てる出てる出てますわぁぁぁ！　こんなあぁぁ、わ、わたくひイキながらぁ、出してしまってますのぉ〜ッ!!」
凄まじい排泄音とともに、惨めすぎる敗北の嬌声が響き渡る。締まりをなくした排泄穴から、大量の内容物が噴水のように巻き上がった。高く掲げられた尻峰から、精液スライムがぐちゃぐちゃと噴出される。今まで溜め込んでいたものを一気に排泄する爽快感に、月美は聞くもあさましいアヘ声で悶え狂った。
「あはあぁ、あひぃい！　ひうぉおお、出ますのぉ、あふ、出る出る出る……あはあぁ！　ひぃ、と、止まりませんのぉ……おあぁ、あっはあぁぁ〜!!」
環視の中、排泄しながらの肛悦絶頂にイキ狂う変態くノ一。アナルからは白粘スライムがぶちゃぶちゃと噴出し、その下の秘門からは湯気だった本気蜜が潮を噴いている。自らの汚液を和服にまみれさせ、あさましくイキ狂う月美。排泄の爽快感と絶頂の激感に酔い痴れ、生意気だった美貌はあさましく蕩けきっていた。

「ああ、おねーさまもイっちゃったんですね。お尻でイって……す、素敵なお顔です……」
「いやぁ、いやぁ！　見ないで雫っ、こ、こんな恥ずかしい姿見てはいけませんわぁ……あはぁあ⁉　そんな、まだ出てますのぉ、おふぉお、と、止まらなひぃぃ～！」
友の声にいっそうの恥辱を煽られ、イキながらにしてさらなる虐悦を覚えてしまう。獣のような嬌声を上げながら、尻を振ってイキ狂う淫乱くノ一。その間にも大量のスライムが逆流し続け、恥辱まみれの解放感が終わらない。前後の穴から汚液を噴き出し悶絶するその姿は、あまりに惨めであさましかった。
「す、素敵。あぁ、雫もイキますぅ。お、おねーさまと一緒にぃ……ま、またイクぅっ！」
ぷしゃっ、ぷしゃああ！　敬愛する月美が晒す狂態に見入られ、幼きくノ一も忘我した。壁に磔にされた肢体が戦慄き、またしても大量の潮を噴いてイキまくる。まるで小水のように噴出した絶頂蜜が、眼下で悶える女忍者へぶっかけられた。
「あぁ、し、雫うぅ……ふあ、あ、あはぁ……っ！」
びちゃっ、べちゃべちゃ。月美のイキ顔を、雫の絶頂蜜が汚していく。互いに敗北の絶頂を極めさせられた二人のくノ一は、惨めな嬌声を淫らに重ね合った。
「ぐはは！　敵に捕まり嬲られイキ狂うか、惨めよの抜忍ども！　所詮牝犬の性からは逃れられん。その悦びを再び刻み、ヤミカゼに従属を誓うのじゃ！」
淫惨な光景に、追忍は勝ち誇った哄笑を上げる。だが、濁鬼は気付いていなかった。
これが二人の抜忍が仕掛けた、最後の策だということに。

『第三章　外法蟲戯』より

ついに捕らえた獲物を、冬華は欲情混じりの視線で見下ろした。
囚われたくノ一の姿の、なんと煽情的なことだろう。蟲毒の影響と体力の消耗により噴き出す汗が、エナメルスーツのてかりを艶めかしく誇張している。ボディタイツは所々裂け、紅潮した柔肌を覗かせていた。鎖帷子から覗く胸元や二の腕には、じっとりと汗の珠が浮かんでいる。荒く呼気が漏れるたび、Eカップの乳峰が艶めかしく上下していた。太ももや二の腕は蜘蛛糸で幾重にも絞り上げられ、糸の隙間からむにゅりと柔肉を搾り出されてしまっている。両手は頭上で一纏めに拘束され、足はそれぞれ左右に引っ張られ股間を開かされていた。およそ敗北など考えられない天才忍者に強要された、抵抗さえ許されない完全なる敗北の姿。そのギャップが、見る者の嗜虐心を否応なくそそり立てた。
「ヤミカゼ最強と謳われたあなたが、こんな無様な格好で這い蹲って……たまらないわ」
「そうか。わたしはどうということもないが……っ」
抵抗できずとも、霧音はあくまで気丈だ。だが、蟲毒に犯された肉体はそうではない。蟲忍の欲情した熱視線で舐め回されただけで、身体の芯が妖しい期待感に震えていた。
――く……疼きが増してしまっている……。
己の肉体の変化を、冷静に分析する。身じろぐたび柔肉に糸が食い込み、感度を増した感覚に痛烈な激感が駆け抜けた。火照る女体は、その痛みにさえ心地よいものを感じてしまう。ボディタイツの締めつけが苦しく、胸を揺らすたび乳首が擦れるのが切ない。鎖帷子のザラつきさえ、鋭敏な美肌にとっては甘い衝撃となってしまっていた。

――まずいな。蟲毒が回りきったか……!?
気丈な強がりの反面、蟲毒に犯された肉体は、明らかな発情状態にあった。
「強がっても無駄よ。今度は見誤ったりしない。身体疼いてるでしょ、敏感になっちゃってるってわかるでしょ？　そんな状態で、このコたちの愛撫にどこまで耐えられるかしら？」
抜忍の美貌を、一筋の汗が伝う。そんな些細な変化も見逃さず、冬華はいやらしい笑みを零し、下僕どもに指令を下す。ぬるぬると粘液を滴らせ、何十何百というミミズの群れが、地面に拘束された少女の身体に集っていく。
鍛え上げられたくノ一の肢体は、どこをとっても蠱惑的だ。蜘蛛糸で媚肉を搾り出された太ももや、Eカップの肉量を誇る熟れきった巨乳。密着したボディタイツのてかりが、悩ましい媚肉にいっそうの魅力を与えている。さらには綺麗なうなじや括られた二の腕、高手縛りで曝け出されている腋の下――様々な箇所に、無数の触手蟲が殺到した。
体液に濡れた肉蟲は、ねばねばと粘着質な柔らかさを誇っていた。腐肉じみた触手が、なつく子犬のように先端部を擦りつけてくる。戦闘服に守られていても、火照った肌に伝わってくる汚辱感は拭えない。さらにはいやらしいことに、触手蟲は脇腹や腋下といった敏感な部分をえり好み、執拗に何度も愛撫してくるのだ。
「っ、汚らわしい！　わたしに触れるな！」
あくまで強気を崩さず、抵抗の言葉を吐くくノ一。だが淫毒に冒された身体は、情けな

いほどに従順だった。鋭敏な腋を擽られれば、頭上に引き上げられている両腕はピクピクと揺れてしまう。太ももをミミズの群れに弄られ、束縛された脚が切なげに痙攣する。

「素敵でしょ？　そのコたちは調教用の肉蟲よ、感じるところ、ぜぇんぶたっぷり可愛がってくれるわ。蟲毒で火照った身体には、少し気持ちよすぎるかもしれないわねぇ？」

「気持ちいい？　ふ、笑わせるな。この程度でわたしが感じるとでも思っているのか」

追忍の言葉を鼻で笑い、少女は自身を鼓舞した。このような蟲責め、おぞましさこそ感じても快感など覚えるはずがない。そして、鍛え上げられた鋼の精神力は恐怖や嫌悪では決して折れない。言葉だけでなく、霧音はこの程度の蟲辱など耐えきる自信があった。

だが、少女はすぐさま思い知らされることになる。ヤミカゼが狙うのは、いかなるノ一でも鍛えようのない生まれついての急所――即ち〝おんな〟としての弱みだということを。

「っ……んぁ、くぅっ⁉」

ずる、ずるり。細身のミミズたちが、少女の喉元へと這い上がる。ヌルついた悪寒に首を仰け反らせる霧音だったが、調教蟲の狙いは汚辱責めだけではなかった。全身密着のシノビスーツも、完全に皮膚を防護しているわけではない。喉下から胸元にかけて肌を覆っている鎖帷子――格子状の隙間を狙い、糸ミミズたちは細身を潜り込ませてきたのだ。

――っく。こいつら、スーツの中にまで入って……！

粘液滴る奇蟲の群れに、美肌を直接犯される。その嫌悪感は、スーツ越しの愛撫の比ではなかった。腐肉じみた感触と体液のとろみを直接肌に教え込まれ、あまりのおぞましさ

に精神までもが磨り減らされる。知らずのうちに、両腕がビクンと戦慄いてしまっていた。
　さらなる反応を引き出そうと、調教蟲たちは執拗に少女の身体を責め続ける。胸元だけでなく腋口の鎖帷子からも、ぬめつく細蟲がスーツの中に入り込んできた。両手を頭上に引き上げられ、霧音の腋は無防備に晒されてしまっている。装束に侵入されれば、もはや守ることなどできはしない。鋭敏な腋窩に、ミミズの頭部がいやらしく擦りつけられる。
　ちゅる……くちゅ、にちゅる……っ。
「くぅうっ……？　そ、そんなところ……ああっ！」
　瞬間、駆け抜ける掻痒感に、霧音はたまらず両手を戦慄かせた。熟達のシノビとて鍛えられない、どうしようもなく鋭敏な急所への集中愛撫。むず痒くもどかしい快悦に、さしものくノ一も喘ぎを抑えられない。漏れ出す声は、どこか甘い媚を含んでしまっていた。
「ははは、何よその可愛い声。武門の誉れ高き彩牙の姫が漏らす声とは思えないわよ」
　――く、ぅう！　おのれ……こ、こんな！
　屈辱的な責め言葉に、きっと奥歯を噛み締める少女忍者。だが内心、霧音自身認めざるを得なかった――媚毒に冒された肉体は、おぞましい蟲の愛撫にさえ感じつつあるのだと。
　鋭敏な腋や首筋をぬるぬるした腐肉に擦られるたび、戦闘中ずっと抑え込んでいた疼きが否応なく刺激される。嫌悪と同時に、どうしようもない甘悦を覚えてしまっていた。たっぷりと粘液を纏わせた肉の刷毛（はけ）が、鋭敏な腋窪をいやらしいほど丁寧に掃き続ける。
「く、くぅうっ！　くそ、そんなとこばかり……！」

高手に縛られている両手が、ピクン、ピクンと切なげに痙攣する。細触手の責めは執拗ではあるが、あくまでか細く力はない。優しすぎる力加減で急所を擽られ、辛いほどのもどかしさが迸る。さしもの天才忍者も、物欲しげな息が漏れるのを抑えられなかった。

「あらあら、どうしたの霧音？　そんなとこばっかりじゃ物足りないって？」

「ち、違うっ！　わたしはそんな……ああ、また⁉」

熟達の調教蟲は、獲物に口答えできるような余裕を与えない。弱みを見せ始めた少女をさらに追い詰めるべく、新たな肉蟲たちが続々と鎖帷子から進入してきた。何本もの触手を詰め込まれ、エナメルスーツの表面には無数のミミズ腫れが浮き出してしまっていた。

――入ってくる……スーツの中、こんなに大量に。くぅう、む、胸にまで進んで……！

汚辱の感触に、息を呑んで感じ入る女忍者。スーツに包まれた乳峰が、ぴくんっと揺れた。装束の中を這い進む肉ミミズが、豊満な巨乳へとぬるついた触手を伸ばしてきたのだ。

Eカップの美巨乳は、仰向けの姿勢でも釣鐘型のまま聳えている。天を向いた凛々しさは、少女の気丈さを表しているようだった。いかにも生意気な肉峰を、調教蟲が粘液愛撫で可愛がる。柔媚な牝肉に触手がめり込まされ、火照った乳肌が容赦なく揉み捏ねられた。

「ん、くっ！　ふぅ、あぁ……！」

甘い乳辱に、霧音もたまらず胸乳を喘がせる。豊かに肉を実らせた女の象徴は、その流麗さの反面、腋や首筋とはまるで別次元の淫らさを孕んでいた。普段は意識していないが、元々が敏感な快楽受容器官だ。蟲毒に冒されたおっぱいは、装束の締めつけに感じてしま

うほど感度を増している。そんな弱点を責め立てられ、官能の炎が擽られた。
――く！　耐えろ……こんなものに屈するものか！
歯を食いしばり、抜忍は猛りを増す官能に抗った。忌まわしきヤミカゼの手管になど屈しない。仲間を助け出し悪の組織に鉄槌を下すまで、決して負けるわけにはいかない――気高い決意に縋りつき、必死で淫悦に抵抗する。切れ長の目は、いまだ抵抗の光を弱めていなかった。だが恐るべき陵辱調教は、そんな強靭な心力さえをも徐々に溶かしていく。
霧音はくノ一だ。いかに心を殺したところで、所詮は〝おんな〟なのだ。秘せない性の弱みを徹底的に可愛がって虐め抜き、快楽で身も心も蕩かせるのがヤミカゼ陵辱の真骨頂。淫惨な手管は、気高き少女の中に眠る〝おんな〟の弱みを、深く深く抉りつつあった。
「くぅ、う、うううぅ……あ、はぁうぅぅんっ⁉」
ビクン！　仰向けで寝そべっていた身体が、突如激しく跳ね上がった。熟れきった巨乳がぶるるんっと踊る。左右に開かされている両足は切なげに痙攣し、勝手に蠢いて股を開き始めてしまっている。淫らな挙動は、明らかに少女の意志を無視したものだった。
――な、なんだ⁉　身体が、も、燃えるようだ……！
突然の異変。毒蛾の淫毒に蝕まれていた身体が、加速度的に感度を増してしまっている。惑乱するくノ一だったが、そんな思考をする余裕さえ一瞬後にはなくなっていた。
「あ、あ……あぁぁうっ！　なっ、こ、こんな……くふぅううう～っ⁉」
くちゃっ！　ぬちゃにちゃ！　スーツに纏わりついた蟲たちが、突如責めを変えたのだ。

刷毛で肌を擦るような優しさから一転、触手の先端で容赦なく媚肉を抉ってくる。さらには内側に入った肉蟲たちが、丸口を開けて媚肉をちゅっちゅっと啄んできた。

「あうぅう、くぅうっ！　やめろ……そんなところ、す、吸うな……あぁぁあっ！」

腋下に喉筋、火照りきったおっぱい――鋭敏すぎる急所を吸引され、たまらず悶絶する少女忍者。シノビの肉体は虫の噛撃に苦痛など感じないが、それが逆に辛かった。淫毒に犯された女体は、痛みには耐えられても甘悦には脆いのだ。噛まれた箇所が熱く疼き、ジンジンと火照ってきてしまう。おぞましい口付けが、なぜだか切なくてたまらない――。

――な……感じてしまっている⁉　おかしい。わたしの身体、敏感になりすぎて……！

淫らな反応が、自分自身で信じられない。血道を上げて鍛え上げてきた身体が、意志を裏切って蕩けていた。小さく首を振り悩乱する霧音に、冬華はいやらしく口を開く。

「ふふふ、可愛い悶えっぷり。ようやく、そのコたちの毒が回ってきたみたいね？」

「んぅ、ぁあ⁉　くううぅ、そうか、これも蟲毒か、あぁあうっ！」

その言葉で霧音は理解する。毒蛾の鱗粉同様、調教蟲の体液にも媚毒成分が含まれていたのだ。装束の上から染み込まされ、またスーツの内部にまで入り込まれ直接肌から吸収させられ、少女の身体は淫毒をたっぷりと塗り込まれている。念入りに何度も何度も可愛がられているおっぱいと腋下など、もう燃え上がりそうなほどに熱を増していた。

「く、冬華ぁ！　貴様、こんな毒まで……んうぅ！」

「生意気な目。並みのシノビなら廃人になっちゃうぐらいの毒量なのに、流石によく耐え

るわね霧音。でもその抵抗もどこまで続くか……んふふ、お愉しみはこれからよぉ」
毒効に抗い、あくまで強気に吼える霧音。そんな気丈さが、狂忍の欲情をいっそうそそり立てる。嗜虐的な笑みを浮かべ、冬華は虜囚に自らの身体を重ねていく。
「く、くぅ⁉　何をする気だ冬華……あうぅっ！」
仰向けで淫縛されている女体に、真上から圧しかかられる。もがく霧音だったが、蜘蛛糸で拘束された四肢では逃れられない。紅と黒、エナメル地の忍服に包まれた妖艶な肢体同士が、正常位でぴったりと重ね合わされた。ボディスーツをむっちりと押し上げている発情巨乳に、真上から責め手の両胸がぐっと押しつけられる。
――く、いけない！　胸は、敏感すぎる……っ！
むにゅ……り。熟れた乳肉が、同じ柔らかさに押し潰される。瞬間、駆け巡る甘い乳悦。
「うぁ、あ、ふぁ……くひぃいいっ！」
たまらず、情けない嬌声を上げる霧音。伝わってくる――蕩けそうなほど柔媚な感触に、発情した女の艶めかしい温度。牝乳同士の接触に、秘せない官能が疼きまくる。
――か、感じる……感じてしまう。これが冬華の胸……くぅう、な、なんという……！
気持ちいい――気持ちよすぎる。同性の乳肉の感触は、魔蟲の汚感とはまるで違っていた。生地越しでもわかる、むっちりと柔媚な柔らかさ。責め手も興奮しているのだろう、押しつけられた乳房は霧音のものよりさらに熱く滾っていた。熱く柔らかくいやらしい、そんな淫靡な塊との接触に、霧音の発情乳は蕩けそうなほど感じ入っていた。

「んふふふ、いいわぁ。霧音のおっぱい、すごく熱くて柔らかい。あぁ素敵よぉ、めちゃくちゃに虐めてあげたくなっちゃうわぁ！」

狂った愛憎のまま、追忍は力任せに胸房を押しつけてきた。紅衣に包まれたDカップの淫乳が、蟲責めで蕩けているEカップの巨乳を押し潰す。冬華はもぞもぞと身体を蠢かし、熟れたおっぱい同士を激しく捏ねくり合わせてきた。四つの乳球が淫靡に撓み合い、柔媚な肉感が蕩け合う。そのたび、たまらない快感が乳芯にまで叩き込まれた。

――く、あああ！　ダメだ、胸は……ぁ！

感度を増していた弱点にとって、乳比べの甘悦はあまりにも苛烈すぎた。牝肉同士がぶつかり合う柔媚な圧迫感、乳肌に食い込まされるスーツの密着感。勃起した乳首が擦れるたび、切ない電撃に打ちのめされる。レズ乳戯の快感に、霧音は頤を反らし感じ入った。

「ふうっ、あ、あぁぁ！　やめろ冬華ぁ、むねばかりなんて……んぁ、あふひぃぃっ！」

むにゅ、むにゅむりにゅり――擦れ合うたび、おっぱいが溶ける。あまりの快悦に蕩けてしまいそうなのだ。発情した女同士だからこそ味わえる背徳の肉悦に、少女忍者は腰をくねらせ悶絶する。覆面から覗く麗貌は、恥辱と快感とで悩ましく艶を増していた。

「可愛い顔。嬉しいわ霧音。そんなにわたしを感じてくれるなんて。でも、わたしのあなたへの想いはこんなものじゃないのよ……んふふ、もっと感じさせてあげるわ！」

敬愛していた天才の乱れ姿に、冬華は倒錯した征服感を覚えていた。沸き立つ嗜虐心のまま、ヤミカゼシノビは少女を嬲り続ける。体重を乗せて胸を押しつけながら、くねくね

と上半身を揺すって激しくおっぱい同士を擦り合わせる。〝花菖蒲〟と〝十六夜〟、二つのシノビスーツが擦れ合い、紅と黒の生地が艶めかしく皺を刻む。照り返るエナメル生地を擦らせ合っての乳比べは、背徳的なまでにフェティッシュだった。

「あぁっ、あははぁ！　気持ちいいわ霧音ぇ……ねぇ、あなたも感じてるんでしょぉ⁉」

「くぅう、ち、違う。わたしはこんな……ぁぁ！」

「あら、わたしは最高よぉ。乳首もこんなに勃起してるの……ね、わかるでしょお？」

必死で抗う抜忍に対し、陵辱者はあくまで享楽的だ。氷の美貌に淫蕩な笑みを浮かべ、冬華はしこりきった先端を思いきり食い込ませてきた。スーツを押し上げて勃起している硬豆が、同じく充血しきっている抜忍の乳首にコリコリと擦り合わされてしまう。

――あ、あ！　ダメだ、ち、乳首なんて……！

媚毒に冒された女体の中でも、特に鋭敏な性感帯。スーツと擦れるだけでも切なすぎるのに、そんな敏感すぎるところを集中的に可愛がられたら――！

「あ、あぁぁ……っんひぃいいいっ！」

キュッ！　コリコリコリッ！　恐怖と期待感そのままに、勃起同士が激しく擦り合わされた。瞬間、稲妻のような切なさが駆け巡る。たまらず、少女は喉を仰け反らせ悶絶した。ビンビンに充血しきっている乳首に、同じく屹立した肉豆が力任せに擦り合わされる。絶妙の硬さと柔媚さを兼ね備えた快楽豆で、鋭敏すぎる急所を可愛がられる。

――あ、あああっ！　こんな……こ、こんなのって……！

切ない。あまりにも切なすぎる。耐えようとして耐えられるものではない。四肢を戦慄かせ、甘い乳悦に感じ入る敗北のくノ一。紅潮した美貌が左右に戦慄き、ポニーテールがゆさゆさと震える。鋼糸が柔肉にぎゅっと食い込み、その痛みにまで被虐の激感を覚えてしまう。くノ一ならではの女色責めに、少女はどうしようもなく翻弄されつつあった。

「感じてるのね霧音。わたしも嬉しいわぁ。もっと気持ちよくしてあげるからねぇ……」

狂った愛は止まらない。淫らに笑い、冬華は右太ももを少女の股間に差し込んでいった。

――う、ああ⁉　そ、そこは……！

閉じようとするより早く、黒生地に包まれた美脚が左右に押し割られた。無防備な股間部に、赤紫のスーツを纏わせた責め脚が押し込まれる。太もも同士がぴっちりと密着し、柔媚なもも肉が互いに縺れ合う。若さ溢れる媚肉はむちむちと撓み、その柔らかさを競い合っていた。くノ一たちのしなやかな太ももが互いに擦れ合い、エナメルスーツのてかりが乱反射する。その様は、あまりに淫靡でフェティッシュだった。

「あ、あぁん……くっ、ふぅっ！」

一番敏感な部分に、しなやかな太ももが擦りつけられる。内股に走る蕩悦に、たまらず喘ぎを漏らす少女忍者。押し潰された秘唇が蠢き、くちゅっと淫らな音を立ててしまう。

「霧音のあそこ、すっごく熱くなってるわ。それに……ふふ。濡らしてるんじゃないの！」

「うぅ、く……っ！」

いやらしい追求に、端整な美貌がかっと赤らむ。言われなくてもわかっていた――これ

までの責めでたっぷりと感じさせられ、自分の肉体は情けない屈服の証を垂らしていることを。黒装束の股布地は、溢れた愛液でねっとりと濡れてしまっている。そんなところを激しく摩擦されれば、スーツの中でぬちゃぬちょと淫音が立つのを止められないのだ。

「あらあら、いやらしい音。口は生意気でも身体は正直ねぇ霧音。隠したってバレバレよ。あなたのあそこ、感じすぎてぐちょぐちょになってるじゃないの！」

「い、言うな冬華。そ、そんなこと……！」

右足を動かして股間を嬲り、少女を追い詰める調教忍者。屈辱的な指摘に、激しく廉恥心を擽られる。紅潮してしまった頬を隠すように、霧音はぷいっと首を背けた。無敵のシノビが垣間見せるそんな女らしさに、責め手の嗜虐心はいっそう高ぶっていく。

「あはは、可愛いわよ霧音。もっと虐めたくなっちゃう。ほらぁ、こうやって……ふふ！」

股間に潜り込ませた責め脚を、追忍はいやらしく前後に動かし始めた。内股気味に股を閉じようとする霧音だったが、蜘蛛糸拘束された太ももは動かない。肉感的な太ももが両足の間に食い込まされ、ぐっぐっと力強く秘唇を押し潰される。

「あふぁ、あ、あっ！　くぅ、ふあぁあっ……！」

股間に走る肉悦に、ピクンと腰が震えた。同性のもも肉の甘味を、装束越しにいやというほど感じさせられる。シノビとして鍛え上げられたしなやかさと、女としての柔媚な肌触り。紅いスーツに包まれた太ももの感触は、発情した秘部にとってあまりにも心地よすぎた。そんな快楽肉を上下に動かされ、スーツ越しにしゅしゅっと秘部を可愛がられる。

感じてしまった霧音の太ももも切なげに痙攣し、二組の美脚が悩ましく絡み合った。
熟達の調教者は、同時に乳首を虐めるのも忘れていない。上半身を押しつけ、柔乳を力強く押し潰し続ける。しこった乳豆をコリコリと刺激され、発情した股間で太ももの悩ましさをたっぷりと味わわされ――たまらない肉悦が、上半身と下半身で同時に燃え盛る。
「はぁ、うう！　くふぅ、っくひぃいいッ！」
魔蟲による粘着愛撫に加え、同性ならではの弱みを知り尽くした女色責め。さしもの霧音も、悩ましい喘ぎを抑えきれなかった。充血しきった肉粒を可愛がられるたび、泣き出したいほどの切なさに苛まれる。太ももを食い込まされている股間も感じまくり、大量の愛液が溢れ出して止められない。装束の股布には、はしたない蜜染みまで浮かんでいた。
――悔しい……。こ、こんな色責めなどに！
心より忌み嫌っていたヤミカゼのやり方に、どうしようもなく翻弄されている。そんな無様な現状に、気高きプライドが軋みを上げた。屈辱を糧に必死に抵抗心を鼓舞する少女だったが、しかし蕩けつつある〝おんな〟は御しきれない。覆面から覗く艶貌は、気丈な抵抗心を剥き出しながらも、同時にどうしようもない快楽に紅潮してしまっている。
「ふふふふ、可愛い表情……わたしも燃えてきたわぁ！」
悦楽に耽っているのは陵辱者も同じだ。少女を正常位で犯しながら、冬華は唇を伸ばした。真正面で向き合っている二人の美貌が、隙間なく密着する。
「ん、あ……⁉　んう……」

くちゅ……。黒い覆面に、濡れた唇が押しつけられた。生地越しに伝わる柔感に、甘い喘ぎを零してしまう少女忍者。覆面越しのキスに、唇がうずうずと火照ってしまう。

「霧音の唇、覆面越しでも柔らかい。このままずっとキスしていたいわ……ん、くちゅ」

シノビの象徴でもある覆面。コスチューム越しの接吻という異常なシチュエーションに、狂忍は倒錯した悦びを見出していた。黒い生地にねっとりと涎を塗りつけ、覆面越しに口付けを交わす。濡れたマスクに浮き出した唇門を、女の舌がくちゅくちゅと舐め犯した。

「んぅ⁉　や、やめろ。こんな……んちゅ、んうぅ！」

狂っている。あまりに異常だ。だがその背徳感こそが、〝おんな〟の官能をいっそう高めていく。知らずのうち、霧音も従順に応じ、自ら舌を伸ばしていた。覆面越しに二人の涎が絡み合い、くちゅくちゅと淫らな蜜音を鳴らす。

「んう、ん……やっ」「は、あぁ……んちゅ、んぅ」

悩ましく喘ぎながら肢体を絡ませ、倒錯した悦びに溺れていくくノ一たち。密着状態で縺れ合う身体は蟲の粘液で濡れそぼり、紅潮した牝肌とエナメルの輝きをいっそう淫らに照り輝かせていた。背徳的な快感に嵌り込んでいく二忍の姿は、なんとも妖しく淫靡だ。

「あああン……ッ、さ、最高。たまらないわ霧音ェ、もう我慢できないッ！」

ビクビクッと背筋が痙攣する。発情した吐息を零すと、追忍は被せていた身体を起こした。甘い色責めから解放され、少女は「はぁっ」と荒く息をつく。だが、その濡れた声は安堵ではなく、快楽を求め悶えている牝の喘ぎにも聞こえた。

「んん、はぁ、はぁ、はぁ。あんっ……あ、あああっ」
巨乳を喘がせ、荒く呼気をつく霧音。スーツの表面には、コリコリに勃起しきった乳首の陰影が浮かび上がっている。下半身は、くねくねと物欲しげに揺れてしまっていた。
「あら、悶えちゃって。もっとして欲しかった？」
「はぁ、はぁ……あ⁉　な、何を、バカな……！」
魔悦に翻弄されながら、少女は辛うじて強気を取り繕っていた。だが、敗北した抜忍に安堵の暇は与えられない。天井に張りついていた忍蜘蛛が、絡めている鋼糸に再び力を込めた。またしても四肢を操られ、無理矢理に身体を引きずり起こされる。
「う、うあぁぁっ⁉」
抵抗する暇もなかった。頭上で組まされている腕が真上に引っ張られ、両足は膝で折り曲げられ地面に縫いとめられる。一瞬にして、霧音は膝立ちの姿勢に再拘束されていた。
「ふぁ……ん、くふぅうっ！」
両腕を真上に上げさせられ、いまなお蟲に嬲られ続けている腋窩がいっそう疼く。もどかしい悦辱に震える瞳に、信じられないものが飛び込んでくる。
「と、冬華……。それは……⁉」
「ふふふ、どう？　素敵でしょう霧音？」
膝立ち状態の虜囚の正面には、立ち上がった冬華が眼前まで迫っている。今の霧音の目線は、ちょうど追忍の股間と同じ高さだ。責め手自身もたっぷりと感じていたのだろう、

〝花菖蒲〟の股布も、淫らな愛液でぐっしょりと濡れている。破廉恥な媚態に思わず見入ってしまう霧音だったが、驚くべきはそれを盛り上げている物体だった。紅紫の生地がぽこぽこと脈打っている。内側に詰め込まれている何かが、窮屈そうに蠢いているのだ。

「も、もうこのコも我慢できなくなっちゃったみたいなの……あはぁ、出るうぅっ！」

ビリィィイッ！　淫蕩な艶声とともに、蜜濡れ生地が内側から引き裂かれた。シノビスーツを食い破り、巨大な内容物が白日のもとに曝け出される。

「う……うぅうッ⁉」

信じられない光景に、霧音は言葉を失った。裂け目から覗くひめやかな部分――濡れそぼった蟲忍の秘淫からは、一本の巨大な肉蟲が生え出ていたのだ。全体のシルエットはペニスに似ているが、そのおぞましさは男性器の非ではない。表面はぶよついた皮膜に包まれ、砲身は腸のように波打っている。亀頭じみて膨らんだ先端では、貪欲そうな丸口が開閉を続けていた。それは冬華の肉体の一部ではなく、一個の独立した怪物だった。

「ふふ、素敵でしょ霧音。このコがわたしの不死の力の源……可愛いわたしの不死蟲よ」

秘淫から飛び出した魔蟲をひと撫でし、恍惚とした口調で語る冬華。巨大な肉塊は、蟲使いが胎内に宿らせている寄生蟲だったのだ。それが宿主の秘門を内側からこじ開け、その醜悪な姿を露出させている。その光景は、悪夢のようにグロテスクだった。

――冬華……。な、なんとおぞましい！

あまりの異形に、たまらず眼を背けようとする霧音。だが、猛る陵辱者がそれを許さな

い。追忍の手が素早く伸び、細い指が凄まじい力でポニーテールをわし掴む。そのまま髪束を力任せに引っ張られ、無理矢理に正面を向けさせられた。
「眼を背けちゃダメよ霧音ェ。これからたっぷり、このコと愛し合ってもらうんだからァ」
「あ、ぐ、ぐぅう！　い、一体何を……ぐっ！」
暴力的な扱い。頭皮に走る苦痛で、美貌が歪む。がっつりと髪を掴んで固定した顔に、冬華はもう一方の手を伸ばした。涎まみれの覆面に指がかけられ――びりぃぃっ！
「ほぉら、素顔でご対面よ。んふふふっ！」
「う、くぅううっ！」
力任せに剥ぎ取られるシノビの証。少女の口元は隠すことなく曝け出されていた。
「ああっ……やっぱり綺麗だわ霧音。あなたの素顔、とっても素敵よ」
力任せに暴いてやった麗貌を、冬華は恍惚とした視線で眺めた。
すっと通った凛々しい鼻梁に、細く上品な唇。覆面の上からでも窺えるとおり、いやそれ以上に、霧音は極上の美少女だった。生真面目そうな麗貌は、いまや快楽と屈辱で真っ赤に紅潮している。滲んだ汗や唇を濡らす涎のてかりが、なんともエロティックだった。
――く。このわたしが、なんと無様な……！
歯噛みする霧音。戦いに惨敗し、いいように嬲られ、素顔まで暴かれた。シノビとしての証を剥ぎ取られ正体を暴露されるのは、忍者にとってこれ以上ないほどの完全な敗北なのだ。屈辱感に打ちのめされる上忍だったが、その美貌を真に歪めるのはこれからだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/